

「ニッポンの未来は女性が創る」

～チャレンジ・キャンペーン in 早稲田大学

平成 15 年 10 月 14 日 (火) 13:00 ~ 16:10、早稲田大学大隈講堂において、「チャレンジ・キャンペーン in 早稲田大学」が開催されました。内閣府男女共同参画局長の名取はにわ氏の挨拶、河合隼雄文化庁長官の基調講演「女と男の働き方の文化」に続いてパネルディスカッションが行われました。コーディネーターとして北村節子氏(読売新聞社調査研究本部主任研究員)、パネリストとして住田裕子氏(弁護士)、井藤滋子氏(日本電気株式会社)、鹿嶋敬氏(日本経済新聞社)をお招きし、「がんばれ女子学生～あなたのチャレンジ応援します」と題して元気の出る討論が展開されました。(参加者 約 300 名)

基調講演「女と男の働き方の文化」

河合隼雄氏(文化庁長官)

本日は大変難しい課題についてお話をさせていただくこととなったが、難しい問題に直面したからこそ人によって答え方が違っており、おもしろい。だからこそ、皆さんがこの問題について考察する際には、皆がどうしているかということではなく私はどうするかというところから考えるようにしていただきたい。時代により、国により、またとらえ方により、この男女の問題は実に様々であり単純に答えを導き出せるものではないが、和を基調とする日本では、正しいことでも立派なことでも合理的なことでも、和を乱すやり方ではなかなか取り上げてもらえないことが多い。そのような中で、この男女の問題を自分のものとして捉え、どうするとうまくいくか、男と女が互いに向き合って真剣にしっかりと対話をしていくことがとても重要。



パネルディスカッション

がんばれ女子学生

～あなたのチャレンジ応援します～

北村節子氏

(読売新聞社調査研究本部主任研究員)

チャレンジには、管理職等の政策・方針決定過程に参画するという「上」へのチャレンジ、いろんな分野に活躍の場を求めるといった「横」へのチャレンジ、そして出産・子育てなどでいったん仕事を辞めてから再就職するという時間軸の「再」チャレンジの3つの意味がある。

教育水準や健康、所得を用いて基本的な人間の能力がどこまで伸びたかを測るHDI(人間開発指数)は、日本は世界の中で9位であるのに対し、女性の社会進出度を測るGEM(ジェンダー・エンパワーメント指数)は44位。日本の女性は教育も受けていて長寿なのに社会を切り開いていないといえる。皆さんも是非多様なチャレンジをして社会を切り開いてほしい。



住田裕子氏(弁護士)

学生時代から今日に至るまで、男女差別というのは多かれ少なかれずっと今でも続いていると感じているが、少しずつ女性も強くなっていかないとはいけな。周りに不満だけを言うのではなく、私たちが力をつけ、意欲と能力に応じて活躍の場を与えられるということがこの「チャレンジ」の趣旨だと思っている。

私の場合はいろいろな幸運が重なって仕事と子育てが両立できたが、そうでなくても普通に子どもを育てるこ



とができ、仕事と子育てとの両立ができるような社会のシステムを作って行くことが必要。

本当に女性が活躍でき、女性の力を生かそうという会社をこちらから見つけて、皆さんの方から逆にアタックしていくぐらいの気持ちでがんばってほしい。日本社会ではそういう企業の方が今後伸びていくと期待している。是非本当の優良企業を探してみしてほしい。

井藤滋子氏（日本電気株式会社）

私が在学していた理工学部的女子学生は女性として扱われた記憶がなく、その後会社に入ってから、実力さえあれば周りに引けを取らなかったと思う

私は進歩の早いIT 関連技術などの新しいことを覚えることが好きで、それをどんどん身につけていくと会社はその技術を活かす場を提供してくれ、非常にうまく回っていた。男性だから理科系だとか、女性だから文科系だとかといのではなく、個人として自分に何が向いている



かということ、自分が持っている力をいかにうまく伸ばして発揮していくかということが一番大切。私もそういう具合にしてここまでこれたのではないかと思う。

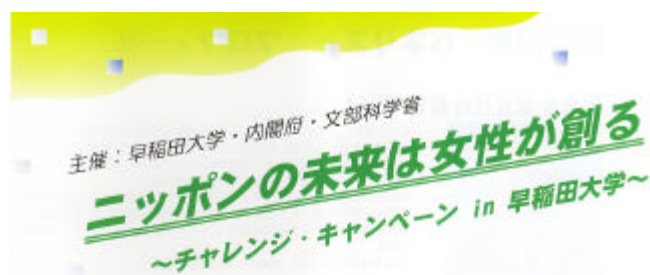
鹿嶋敬氏（日本経済新聞社）

均等法第一期生のその後を追ってみたことがあるが、大体結婚・出産を契機に総合職女性たちが辞めているという傾向が読み取れた。男性型の職場風土というのは基本的には変わっていないと思う。四大卒の場合は、いったん会社を辞めると再就職が非常に難しくパートしかないという現状に直面している。

変わっていく契機として、2007 年ごろから団塊の世代が定年を迎えその穴を女性で埋めようという考え方が、ポジティブ・アクションが企業に浸透しつつあるということが挙げられる。それに加えて、女性自身の気構えも大切。これから就職する学生にとって、



働くということに対して、前向きに考えてポジティブな意欲を持った姿勢で臨んでいけたきたい。そういうことが結果として皆さんの地位の向上につながっていくと考える。



激変する社会の中で、自分らしさを模索するすべての女子学生へそして、ともに次代を生きるすべての男子学生へ熱いエールをこめて贈る特別企画！

基調講演「女と男の働き方の文化」 河合半雄文化庁長官



パネルディスカッション(14:10～)
「がんばれ女子学生～あなたのチャレンジ応援します～」

【パネリスト】
白田 裕子氏(弁護士、男女共同参画会議議員、「行列のできる法律相談所」出演中)
井藤 滋子氏(日本電気株式会社第二ネットワークソフトウェア事業部
第一システムサービス部マネージャ)
鹿嶋 敬氏(日本経済新聞社編集委員、男女共同参画会議情報地理・放送専門調査会委員)

【コーディネーター】
北村 節子氏(読売新聞社調査研究本部主任研究員、男女共同参画会議基本問題専門調査会委員、チャレンジ支援ネットワーク株式会社代表)

日時：2003年10月14日(火) 13:00～16:10(12:00受付開始)
場所：大隈大講堂(入場無料、一般来聴歓迎)

問合せ先：早稲田大学キャリアセンター TEL:03-3203-4332
<http://www.waseda.ac.jp/career/>

学生の声

パネリストの方々の方が全く飾らない言葉と本音で社会の現実を語ってくださった。その中で、現実の社会は男女平等にはほど遠い状況であることを痛感させられた。国は法律制度を整え、企業は「男女平等」を呪文のように唱えているが、実際の社会人の心理は追いついておらず、形づくばかりが先行してしまっている。しかし、男性でも女性でも、実力があればやはり企業に必要とされるわけで、「実績を作ることが、結婚や育児休暇の後でも戻りやすい職場をつくる」ということにつながり、「戻ってきてほしいと思われる人材」になることが肝要であることを学んだ。

実際に社会に出なければ分からないことであり、なかなか聞く機会もない貴重なお話は、今後社会に出ていくことを考える上で、大変参考になるものだった。

(早稲田大学法学部 中島美紗央 -
「早稲田ウィークリー」第 1011 号より抜粋)

チャレンジ支援ネットワーク検討会公開討論会 (於 早稲田大学)
女子学生のための就職支援 就職が変わる! 職場が変わる!

平成 15 年 10 月 20 日 (月) 14 : 40 ~ 16 : 40、早稲田大学国際会議場井深大(いぶかまさる)記念ホールにおいて、チャレンジ支援ネットワーク検討会公開討論会が開催されました。パネリストは、木谷宏氏 (株式会社ニチレイマネージャー)、日下幸夫氏 (早稲田大学キャリアセンター副センター長)、河野真理子氏 (キャリアネットワーク代表取締役会長)、小林いずみ氏 (メルリンチ日本証券社長)、吉本圭一氏 (九州大学助教授) の 5 名、コーディネーターは北村節子氏 (読売新聞社調査研究本部主任研究員) が務められ、会場からの質問も交えて、活発な討議が行われました。(参加者 約 200 名)

北村節子氏

(読売新聞社調査研究本部主任研究員)

政府の女性のチャレンジを支援しようという背景には、少子高齢化の問題がある。世界の状況を見ると、職業を持った女性が多い国ほど出生率も高いと言われており、女性が仕事をしているから子どもが産めないというのは間違った先入観であることが分かってきている。日本の少子化をこれ以上進めずに、バランスの取れた人口構成をつくっていく上でも、意欲と能力に応じて、女性の雇用を確保していくことが必要であるという認識が生まれてきている。その一環として、若い人たちの社会への入場に際しても応援していこうとしている。



木谷宏氏

(ニチレイ総務企画部人材チームリーダー)

企業の社会的責任が女性の活躍を支えるはずである。1 つは、「成果」の視点。これから主流になる女性を企業で育成して、大きな成果を出していく。2 つ目は、お客さまからの「共感」。冷凍食品の市場が拡大したのは、まさに



女性の社会進出と歩を一にしている。3 つ目は、「公正」。従来、男女に格差があったならそれを是正するのは当然のこと。

ニチレイでは、ポジティブ・アクションを積極的に推進している。

日下幸夫氏

(早稲田大学キャリアセンター副センター長)

当大学では、学生サービス改革を打ち出し、低学年からのキャリア支援を強化しようと、平成 14 年にキャリアセンターが誕生した。私たちは、「男性だから・女性だから」という発想を転換し「あなたは」というスタンスで学生と向き合っている。女子大生に何か言うとしたら、経済的に男性に依存することほど不確実でリスクなことはいないということ。進路多様化の時代だからこそ、女子学生には就職を重要な要素だと考え、自活の道を切り開いていただきたい。



河野真理子氏

(キャリアネットワーク代表取締役会長)

「人材ビジョン」とは、企業が、どの部門に、どんな人材を、何人、どのような雇用形態で採用するかというイメージである。それを知らないと、せっかく入社しても花を咲かせる道ではなかったというミスマッチが起きてしまう。それを解消するためにも、人材ビジョンを知っていただきたい。

企業は、先見性とか着眼力とかチャレンジ精神を求めている。社会に興味を持って、着眼力を持って、問題点を見つけ出してほしい。



小林いずみ氏 (メルリンチ日本証券社長) 吉本圭一氏 (九州大学助教授)

バブルと前後して日本の金融機関が再編されたように、私たちは社会が再編されていくという大きな渦の中にいる。何がどう変わるのか、どういう産業が伸びてどういう企業が衰退していくのか、はっきりとは分からない。過去から将来を推測することの限界を考えると、今から就職する会社はどこがいいのかを考えるのは大変難しい状況にあるといえる。



経済産業省の研究会では、女性であれ男性であれ能力のある個人を遇するという企業風土を持つ会社は女性の就職比率や管理職比率、それから経営パフォーマンスにおいても、よい方向にあるという結論が出されている。皆さんも、オーダメイドの就職指導とオーダメイドの自分なりのキャリアの形成を考えていただきたい。

女性のチャレンジ支援に関わる問題を考えるときは、「キャリア」の概念を考えないといけない。多様なキャリアが社会を変えることになるが、そこでキャリアとは収入を得る職業だけではなく家庭での仕事、地域での仕事を含めての役割、役割遂行の連鎖であり、そこで身につけられた知識、能力、態度を総合しているものである。



大学に求めたいのは再挑戦型の学生のチャレンジを支援し、これからのキャリア形成とこれまでの大学の位置づけを吟味していくこと。企業に求めたいことは、特に30代前半くらいまでを大切に再チャレンジができるよう努力していくこと。そして、社会全体として考えるべきことは30代までの多様なキャリア調整のための人的・財政的・ノウハウ的な支援を進めていくこと。

今年のヒット商品は学生キャリアアドバイザー ~キャリアの総合商社をめざす~

早稲田大学キャリアセンター

早稲田大学キャリアセンターが誕生して1年半が経った。従来のような就職活動の支援だけではなく、低学年からのキャリア支援の強化がその使命である。そのため、様々な行事を新たに企画した。専門家を招いて行う「キャリア講座」、各界で活躍するOB・OGの生き方に学ぶ「キャリア講演会」など、いくつもの新企画が動き始めた。

しかし、キャリアデザインは人それぞれである。社会構造・経済構造そして雇用環境の変化にともない、進路選択もますます多様化・個別化し、キャリアセンターの役割も個々の学生のニーズにどう対応するかが問われるようになる。

自分が何に向いているのか、どういうキャリアが自分に相応しいのかを、自らを振り返ることによって模索し見極めていく「キャリアプランワークショップ」は、やってもやっても希望者があとを絶たず、結局17クラス750人も参加者があつた。あなたのエントリーシート再点検、面接に成功するポイント、グループディスカッションって何やるの、など就職活動のノウハウを短時間で手軽に聴くことができる「就活ミニセミナー」。毎週6コマを開催して参加者はすでに1500人を超えた。

要するに、こまめにいつでも何かやっていて、キャリアセンターに行けばなんか得しちゃおうという状況を作ることが大事なのだ。

ところで、いまどきの学生にとってパソコンや携帯電話はなくてはならない「武器」だ。企業情報の収集も企業との連絡もすべてインターネット。だから、就活中の子供を持つ親が、一日中在宅して企業からの電話を待つなどという苦労話は過去のことになった。しかし、彼らはメールに頼りすぎて人とface to faceで話をすることがなくなった。昔は先輩から後輩へ様々な情報が口承伝達されていたのに、今はそれがほとんど行われていない。この情報化時代に、就活に望む学生たちが途方に暮れているのにはそんな理由もある。

そこで考え出したのが「学生キャリアアドバイザー」だ。最も生々しい就活体験を持つ4年生のノウハウをダイレクトに後輩に伝えよう、という意図で募集したところ20人が手を挙げた。全く無報酬のボランティアで、後輩のためひいては母校のために役立ちたいという志を持った学生たちである。基礎研修を終え、2003年10月中旬からウィークデーの午後「勤務」に就いてもらったが、これがたいへんな人気で、すでに300人を超える後輩たちが先輩のアドバイスに励まされ、就活に飛び出していった。

さらに、学生アドバイザーたちはただ待っているだけでは物足りない、2月6日にイベントを企画した。名付けて「ここだけの話ですが大会」。と言っても、決して下世話な話ではなく、彼らの体験をベースにして就活の基礎をテーマごとに設けたブースを利用して後輩に一気に伝えようというものだ。運営のすべてを学生だけで行ったが、なにより驚いたのは学生たちのプレゼンテーションの上手なこと。250人の参加者を集めて大好評だった。

自分の将来を見つめ、進路を探す学生たちに今何が必要かを見極め、それを様々なネットワークを活用して提供していくことこそ、これからのキャリア支援に求められることである。だから、私たちは言うのだ。早稲田大学キャリアセンターはキャリアの総合商社です、と。

平成 15 年 11 月 29 日に東洋大学で開催されたキャンペーンでは、女性を取り巻く環境が激変している中、これからキャリア形成を進めようとしている低学年学生（主に女子学生）向けに、どのような生き方、働き方が望ましいのかなどについて考えることを目的として、女子学生だけでなく男子学生や一般の方々も対象とした基調講演及びパネルディスカッションが実施されました。最初に河野真理子氏（株式会社キャリアネットワーク代表取締役会長）より「就職から考える これからのキャリアデザイン[®]」と題して基調講演が行われました。引き続き、大星公二氏（株式会社 NTT ドコモ相談役）、河野純子氏（「とらばーゆ」編集長）、広岡守穂氏（中央大学教授）よりそれぞれパネリストの主張が行われ、それを踏まえたパネルディスカッションと会場からの質問・意見をもとにしたフリーディスカッションが白石真澄氏（東洋大学助教授）のコーディネートにより行われました。（参加者 約 300 名）

基調講演

就職から考える これからのキャリアデザイン[®]

河野真理子氏

（キャリアネットワーク代表取締役会長）

変化していく労働市場、雇用環境を知り就職を機会に今後の人生設計を考えるため、等身大の自分を見つめること、中長期でキャリアを考えること、将来像をイメージすること、ライフビジョンとキャリアビジョンを立てること、目標を持ってキャリアプランを立てること、そのキャリアプランに沿って自分を育てることや能力を伸ばす方

策を考えることが大事。生涯キャリアの入口としての就職活動という局面では、社会人になるということ具体的にイメージして自分のプライオリティを絞り実行していくことが重要。



パネルディスカッション

大星公二氏（株式会社 NTT ドコモ相談役）

NTTドコモでは一人ひとりが年齢・性別にかかわらず能力のある人を有効活用していくことを実践してきた。性別、学歴、国籍をマスクして事務職の採用を行ったところ、女性の採用割合が45%となった。国籍に関しては、15か国にも及んだ。国際会議に出てみると、各国の参加者は女性が非常に多く目につく。これに対して、日本は男性ばかり。社内でも、男性にない視点で商品開発等を行った優秀な女性がいた。国際的にみて、日本においてこれほどまで女性が活躍できていないのはおかしいと言っている。国際競争が激しくなる中で、意欲と能力がある優秀な人を有効・適切に活用できるようにしていかなければいけない。



河野純子氏（「とらばーゆ」編集長）

一人の働く先輩として話をしたい。今思えば自分は大学時代は怠け者の部類に入ったと思うが、ここまで働き者になることができた理由を考えると次の4つのものが挙げられる。1つ目は、幸運にも自分の好きな分野で仕事ができたと。2つ目は、性別や年齢にかかわらず個人の適正を重視してチャンスを与えてくれる会社にめぐり合ったこと。若い人や女性にもどん

ん仕事を与えてくれた。3つ目は、たくさんロールモデルに会えたこと。会社に多くの女性がいた。4つ目は、一つひとつの機会を大切にしてチャレンジを続けてきたこと。やりた



とがわからないと言っても、何もチャレンジしないことは一番もったいないこと。就職はいろいろなチャレンジしてみればじめて見つかるもの。時間はたっぷりあるので、是非楽しみながらチャレンジの一步を踏み出してほしい。

た。妻は、子育てのためにいったん仕事をやめざるを得なかったが、再チャレンジをし再び社会に復帰している。そのパワーはものすごいものがある。男性の皆さんも是非家庭内において対等な責任分担をしてほしい。

広岡守穂氏 (中央大学教授)

私はNPO推進ネットというNPOの活動も行っている。その中でも働いている人は、最近女性が非常に多くなってきている。自身は学生結婚をし、子供が5人いて、家庭内における育児、家事分担を行ってき



学生チャレンジ応援隊の取組

東洋大学就職部

東洋大学は、平成15年11月の「チャレンジ・キャンペーンin 東洋大学」の実施に当たって、単なる一過性のイベントで終わらせるのではなく、このキャンペーンを契機として継続的なキャリア形成支援・就職活動支援プログラムを新たに企画実施したいと考えていた。偶然にも、就職活動を終えた4年生から、「3年生のために就職講演会を行いたい、就職課にも協力してほしい。」という相談があったので、その話をしたところ「面白そうなので、是非、やってみたい。」ということになった。そうして生まれたのが、「学生チャレンジ応援隊」である。

彼らには11月に開催するチャレンジ・キャンペーンの趣旨を説明し、そのテーマにそった内容のワークショップを行いたいという条件のみを提示し、具体的な内容を任せることにした。

まず、学生チャレンジ応援隊から出てきた企画が、「ジョン・レノンに学べっ!」というワークショップだった。彼らからの説明を聞くまで、チャレンジ・キャンペーンのテーマと全く結びつかなかったが、「ジョン・レノンとオノ・ヨーコ夫妻を通じて『夫婦のあり方、男女の関係』を考える」という視点は、とても新鮮であり、かつ我々からは決して出てこない着眼点と感じた。8月上旬、埼玉県さいたま市にあるジョン・レノン・ミュージアムを見学し、その後ミュージアム内のカフェで行われた意見交換は、参加した多くの学生に新しい発見を与えたようだった。

その後、ハリウッド女優へのインタビューで構成された映画「デブラ・ウィンガーを探して」の鑑賞会(8月下旬)、男女共同参画会議議員である神田通子学長(当時)を囲んで行われた「学茶会～結婚したらどうするの??～」(9月下旬)と我々には思いもつかないワークショップが次々と企画され、彼らの手によって実施された。そして、キャンペーン実施の直前には本学卒業生を講師に迎えて、講演会「活っ!! 東洋生～世界はもっと面白いはずだ。～」を行い、彼らの活動は1つの区切りを迎えた。

学生チャレンジ応援隊の活動を傍らから見ていて感じたことは、「彼らは彼らなりに悩みを考えている」ということだった。重要なことは、我々大人が懇切丁寧なお膳立てをすることではなく、彼らが、その思いや不安を解消するための「場」を、自らの手で作り出せるような支援をしていくことではないだろうか。それがひいては行動を起こすことをためらっている学生にも、何らかの影響を与えることになるに違いない。

今回の試みは、小さな一歩ではあったが、本学にとっては大きな第一歩であった。学生チャレンジ応援隊が残していった芽を大事にしていきたいと考えている。

形のない夢への第一歩」～チャレンジ・キャンペーン in 名古屋工業大学

平成 15 年 12 月 10 日、名古屋工業大学講堂において、同大学の主催により、チャレンジ・キャンペーン in 名古屋工業大学 形のない夢への第一歩」が開催されました。これは、今後増加するであろう女子学生に対して、様々な職業分野で活躍している女性達を招き、チャレンジに夢を持てるような機会を設けるために行われたものです。文部科学省としても、女性の多様なキャリア形成の支援に取り組んでいます。平成 15 年 10 月には、女性の多様なキャリアを支援するための懇談会において「多様なキャリアが社会を変える」第 2 次報告(女性のキャリアと生涯学習の関わりから)が取りまとめられ、その中で、一人ひとりが自分自身と環境の変化に柔軟に対応して、自ら意思決定していく能力・資質を養うことの重要性や、進路を設計する際に参考となるようなモデルを広く提供することの必要性などが提言されたところです。(参加者 約 100名)



筑波大学の渡辺三枝子教授による基調講演では、「夢」は形がなく、追うほどに変化し広がるものであり、特に変化が激しい昨今の社会では、学生時代の知識や経験と自分の将来が直接つながるとは限らず、むしろ人生を一步一步進むごとに少しずつ

新しいものが見えてくるのであり、世の中を広く見ていく好奇心を持つことも重要であることなど、学生への示唆に富んだ講演をいただきました。そして、名古屋工業大学の 3 名の卒業生から、それぞれのキャリアの選択にあたって考えてきたことや、今後の取組姿勢、これからの学生に期待することなどをお話いただきました。佐藤幸恵氏(リアルスタイル有限会社)は、10 年間仕事をしてきたのは周りの人々のおかげで、それで自分が成長できたこと、大島尚美氏(名古屋市男女平等参画推進センター所長)は、自分が好きになって、かつ社会的な意義や価値が見出せる仕事を選ぶのがよいのではないかとということ、永田タカ子氏(トヨタ自動車株式会社塗装生産技術部)は、女性は注目されることが多く、否定されることも得することもあるが、チャンスを与えられたらそれをプラスに考え、活かすべきであることなどを話し、その後、学生達との意見交換がなされました。3 人の卒業生から体験に基づく話を聞いたことで、学生が具体的に将来を考えるよいきっかけとなり、また、女性が比較的少ない分野である国立の理工系大学で、女子学生支援のためのキャンペーンがなされたのも、意義の大きいことであつたと考えられます。